

中

白

乗

昇

血よりも濃いつながりは夫婦だと思いが、世の中にも血より濃いつながりがある。私とおお(語尾上がる)ちゃんの間はまさにそうだ。彼は私を「せんさん」と呼び、私はメルでは宛名をなぜか「おおどの」と書く。私が沖縄にいた頃は夫人のとよた真帆さんと何度か訪ねてきてくれた。週に一度は何かしらの方法で連絡を取り合い、ここ数年は互に行き来しては顔を合わせ、映画と音楽とエレキギターの話をして数日を過ごし「そんじゃ、また」と別れる。時を忘れて空が白み始めるまで何時間も女子中学生のように電話したこともある。

# インタ



## ■ 青山真治監督との親交 ■

仙頭 武則

シナリオハンティングと称して旅に出ると、彼の教え子、私の教え子、私の妻が同行することもある。彼が大病をしてその容体が人を介して電話で伝えられた後、私は声をあげて泣いた。私の背中をなでながら妻は「おおちゃんが元気になってくれたら、二度とこんな心配をさせるなど言っていない」と私より大粒の涙を流した。後悔のないようこの場で告白しておく。あの時、私たちの映画のせりふがむせんでいた。「生きるとは言わん、死んでくれ」

初めて会ったのは一九九三年六月だったそうだ。日付は「あれ、いつだったけ」と聞けば、いつも彼が「ちよっと待

# 血より濃いつながり

2018年9月、びあフィルムフェスティバルでの青山真治監督と筆者。文中の映画のせりふは、筆者頭上に映る「ユリイカ」から



ってよ」とメモを取り出し教えてくれる。あらゆる業種で名を成す人物は例外なく克明に出来事を記している。「歴史とは現在と過去との対話。過去を主体的にとらえることなしに未来への展望をたてることはできない」(E・H・カー)。彼の記録は私たちの「歴史」であり、未来への展

望だ。私など、彼の記録の存在をよいことに近年急速にさびつつある記憶だけを頼りに生きている。それでも未来はくると信じるけれど。

その日、彼は月刊誌の映画ライターとして私をインタビュウしにやってきた。本題のインタビュウもそこそこに、時間を大幅に超過してクリントン・イーストウッド作を語り、意気投合した。後日、私のチームに合流し、助監督、監督補として昼夜を問わず多忙で濃密な日々を共に過ごすことになった。幾重にも連なる時間が醸成されて「現在」がある。

「人生唯一の就活面接だった」とメモにはあるそうだ。(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー) 次回掲載は六月三日